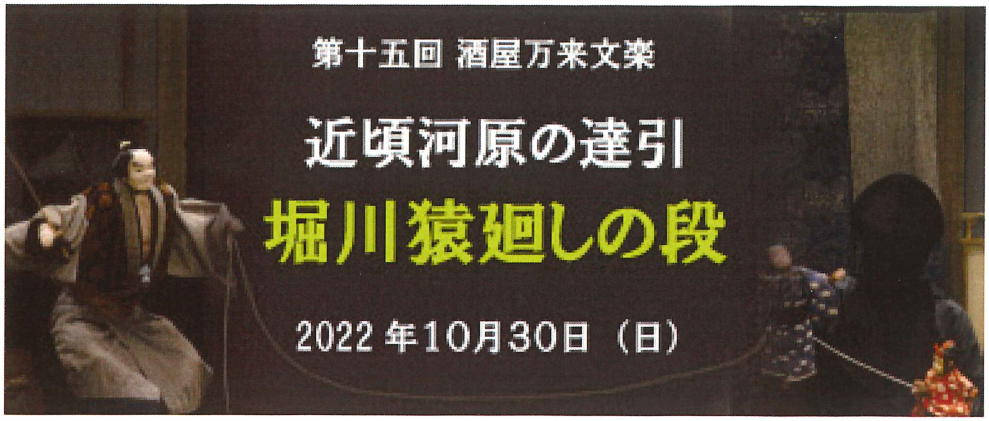

西宮は文楽の源流「傀儡師」発祥の地といわれ、文楽と大変縁の深い町です。同時に西宮は全国有数の「酒どころ」でもあります。この「酒」と「文楽」という西宮を語るに欠かせない二つの要素を、造り酒屋において同時にお愉しみいただこうというのが、「酒屋万来文楽」です。第15回目となる今回は、「近頃河原の達引　堀川猿廻しの段」を取り上げました。

世間の片隅で細々と生きる親子三人とお尋ね者の男一人をめぐり、どこまでも優しく人情に厚い人々の心の内が、実に細やかに描かれ、世話物の名作といわれる本作ですが、中でもおしゅんが、あくまでも伝兵衛と運命を共にしようとする自らの真情を切々と訴えるクドキの部分から、おしゅんの心根を知った母が、断腸の思いで伝兵衛と共に行くことを許すに至る件では、今春「切り語り」となられた錣太夫の、真骨頂といえる語りでお聴きいただきました。

これに続く見どころ、聴きどころは、本作クライマックスとなる、華やかで変化に富んだ三味線の旋律にあわせて二匹の猿が芸をする猿廻しのくだりです。本来めでたい門付け芸である猿廻しですが、ここで演じられるのは『曽根崎心中』を題材したもので、二人の悲しい運命を暗示させるようでもあります。この場面では、オスとメスの手人形のお猿さんが両手で遣われていますが、この猿たちの無邪気に芸をする愛らしい仕草も、今回はごく間近でご覧いただくことになります。この、どこまでも明るい、はなむけの芸が、実は心中する運命にある二人を見送るためのものであることを思うと、切なさが一層胸に迫る幕切れとなります。

文楽公演に続く後半の「文楽の手ほどき」では、吉田和生師に、演じる上での苦労や演目にまつわる興味深いエピソードおうかがしました。舞台と客先がとても近いので、お客様からのご質問も多く、和生師は一つひとつに丁寧にお答えくださいました。

第十五回 酒屋万来文楽

近頃河原の達引
堀川猿廻しの段

旨酒と流れるような節回しが誘う酔い心地。
ごく間近で触れる、名人の至芸。
「酒の町」西宮の造り酒屋で愉しむ文楽の会。

撮影　三宅晟介

令和4年10月30日(日)

午後3時開演（受付開始・開場2時半）白鷹禄水苑 宮水ホール

■全席指定（約90席）　＊席数制限のため、満席の際はご容赦ください。

■入場料　8000円　■蔵出し限定酒などのワンドリンク付き